

コーパスとドイツ語教育 日本人のための「自然なドイツ語」の提供を目指して

大藪正彦

はじめに

2008 年春季の日本独文学会シンポジウム「大規模コーパスを用いたドイツ語研究——ドイツ語教育への応用を目指して」(在間進氏ほか) では、コーパス研究のドイツ語教育への応用という点が強調された。しかしながら、シンポジウム後半におけるフロアとの議論では、全体の関心はむしろ個別の言語現象、つまり表題である「ドイツ語研究」の方へ向かい、副題の「ドイツ語教育」の部分については議論が深まらないままに終わったという印象であった。そこで本稿では、ドイツ語教育という観点から、コーパス利用の可能性や注意点について考察し、先のシンポジウムの副題で示された「教育への応用」というテーマについて議論を深めてみたい。とりわけ、コーパス分析の結果から有意なものを見出す必要があること、そのためには並行して誤用分析や対照研究を進めていく必要があることを述べる。そして本稿の最後には、翻訳資料を用いた対照研究の例を紹介する。

I. コーパスの主な二つの用法——用例検索と頻度調査

1. 用例検索

コーパスの主な用法の一つは用例検索である。実例を用いれば、より「自然」な例文を提供することが可能となる。しかし、実例は常に「自然」で、作例は常に「不自然」であるのかというと、もちろんそうではない。次は *Mannheimer Korpus 1* の中に筆者が偶然見つけた例である。

- (1) Ich warten auf sechs Richtige in Lotto. [...] Dann ich zahlen Gehalt von meine Mann und nicht mehr bekommen graue Haare. (*Bildzeitung* Juni 1967)

これは実は外国人サッカー監督の夫人によることばとして紹介されているものである。Beaugrande/Dressler (1981) を引くまでもなく¹、テキストのレベルになると、用いられる言語表現が「文法」に適合しているかどうかという要因の占める部分が限られたものとなるわけである。

「実例か作例か」という問題は、語学研究においても同様に問題となる場所である。それぞれの長所、短所について、白川 (1999) が簡潔にまとめている。コーパスの教育利用を考える場合にも参考になると思われるので、以下に簡単に紹介しておく。

実例にあたる必要性： ①直観は意外と当てにならない、②作例は思い込みで左右されやすい、③作例は問題発掘には不向きである

¹ テキスト成立に関わる要因として、Intentionalität, Akzeptabilität, Situationalitätなどを参照。興味深い問題であるが、本稿とは直接関係ないので立ち入らない。

実例には実例の問題：①用例採集は地味で根気が要る，②信用できる材料を選ぶのは難しい，③収集の網に掛らない用例もある，④混沌とした言語現象を解きほぐすには相応の洞察力が必要である

実例にあたることの利点として，直観・思い込みからの脱却という点は重要であろう。例として日本語の「人称制限」の問題を取り上げてみよう²。いわゆる心理述語に関して，一般に日本語には人称制限があるが，ドイツ語にはない——例えば「彼は悲しい」は不自然であるのに対し，„Er ist traurig“ は特に不自然ではない——と言われる。ただし，実例にあたってみると，反例は意外と簡単に見つかるものである（以下，例文中の下線などはすべて本稿の筆者による）。

- (2) アマゾン³は悲しく，寂しかった。（仮面ライダーアマゾン，ナレーション）
- (3) 漱石はもちろんその後作家として大成し，日本近代文学の礎を作ったわけだが，晩年は身体をこわして，自宅で病の床にふせていた。なにしろ胃が痛かった（見るからに胃をこわしそうなタイプの人ですよ）。（村上春樹「村上ラヂオ」）

もちろん，これらの例では，語り手が登場人物の内面を代弁しているということであり，これだけをもとに「日本語に人称制限はない」と言ってしまったのでは乱暴すぎることになる。ただし，実際の言語運用を射程に入れた途端に，単純な一般化について相対化を迫られるということは十分にあり得ることである。

例文 (2), (3) は，確かに実例ではあるが，典型的な使用例であるとは言えず，従って例えば日本語の教材として適しているとは言えないであろう。コーパスの使用が容易になったとは言え，コーパスに含まれる用例を辞書や教材の素材とする際には，それらを確かな目で吟味する必要がある。結局のところ，その言語に関する十分な語感が欠かせないということである³。また，上述の白川 (1999) も指摘しているように，説明の便宜という点では，作例の方が実例より論点が明瞭になるということがある⁴。当然のことであるが，両者の長所と短所を踏まえたコーパスの利用が肝要であるということになる。

2. 頻度調査

2.1. 語彙の頻度

語彙の頻度に関しては，レマ（見出し語）の頻度，特定の変化形の頻度，特定の語義の頻度などが問題となる。語学教育との関連で言えば，レマの頻度調査結果は，そのまま基本語彙選定の参考にすることができる。ただし，ドイツ語教育への適用を考えた場合，日

² 本論集所収の田中論文も参照。

³ 雑誌『英語青年』の2008年3月号では「英和辞典の新時代」という特集が組まれているが，そこでは，コーパス依拠を謳っている辞書であっても「自然」とは言えないような例文が認められるということが指摘されている。

⁴ 結合価辞典 VALBU (Schumacher u.a. 2004: 23f.) では，実例 (Originalbelege) に加え，教育的配慮から，改変した実例 (adaptierte Belege) と作例 (konstruierte Beispiele) も用いたと説明されている。

本人のドイツ語使用という観点を加味することが必要である⁵。基本語彙リストの作成はすでにさまざまな形で行われており、今後は独和辞典などにおいてもその成果が取り入れられていくことになるとと思われる (在間 2009 を参照)。

変化形の頻度に関してもコーパスの利用は有効である。変化形の競合 (例えば 2 格語尾の -s と -es) や語形のバリエーションの競合 (例えば *gern* と *gerne*) などについては、とりわけ大規模コーパスを利用することによって、その使用状況の客観的な調査が容易となる。また、変化形と語義の両方にまたがるケースとして、例えば動詞変化形の *weiß* と形容詞の *weiß* のような対立も問題とすることができよう⁶。

語義の頻度調査については、機械的な作業は困難であるが、語学教育にとっては重要である。学習者にとっては最初に学ぶべき語義の指針ともなるし、辞書編纂においては、語義を頻度順に配列することによって、検索の効率化をもたらすことができる。ただし、語義の頻度順配列にも問題がないわけではない。頻度順にこだわることによって有機的な意味のまとまりを切り崩してしまい、語義の全体的理解を阻害してしまう可能性が生じるからである⁷。結合価辞典である VALBU (Schumacher u.a. 2004) から以下に簡単な例を示す (ちなみに、この辞典の前書きでは、この辞典がドイツ語教育の要請に応えるべく企画されたことが謳われている。その作成にはコーパスが利用されているとのことである。ただし、語義配列が厳密に頻度に基づいているのかどうかは定かでない)。

- verlängern** 1 etwas irgendetwas länger als vorgesehen gelten lassen
2 etwas irgendetwas länger als üblich dauern lassen
3 länger machen
- korrigieren** 1 jemandes fehlerhafte Äußerung mündlich korrigieren
- helfen** 1 bei jemandem/etwas eine gesundheitliche Besserung bei etwas bewirken

見出し語 *verlängern* においては最も基本的と考えられる語義が 3 番目に配列されている。外国人学習者の立場からは、たとえ実際に 1 の語義が最も高頻度であったとしても、3 の語義が最初に挙がっていた方が意味の理解が容易となるのではないだろうか。さらに言えば、語義 1, 2 は語義 3 の中に含めてしまうことも可能かも知れない。

語義記述の問題点が顕著に現れているのが、次の *korrigieren*, *helfen* の項である。下線部の *mündlich*, *gesundheitlich* という要素が、果たしてこれらの語の語義記述にとって有意味なものであるのかどうかは甚だ疑問である。いたずらに語義を増やすだけの結果になって

⁵ 例えば IDS が公開している 3 万語の語彙リスト DeReWo では、Japan が 1043 位であるのに対し、China が 827 位である。日本におけるドイツ語教育で基本単語 1000 語を選定するというような場合は、別の観点からの調整が必要であろう。

⁶ このような調査は品詞情報が付与されているコーパスを用いれば、比較的簡単に行うことができる。例えば DWDS-Kernkorpus では、定動詞の *weiß* が 33,394 件、述語的形容詞の *weiß* が 1,243 件ヒットする。その比率は約 27 対 1 である。つまり我々が „weiß“ という語形に出会った場合、動詞の変化形である可能性が極めて高いことになる。このような頻度調査の構築は、教える側の教師にとっても有益なものとなるであろう。

⁷ 先に触れた『英語青年』2008 年 3 月号の特集「英和辞典の新時代」でもこの問題が論じられている。

いないだろうか。機械的な処理の難しい意味に関する領域では、十分な洞察力が必要とされるということであろう。

2.2. コロケーションの頻度

コロケーションの頻度に関しては、共起語の頻度に加え、共起語の数、形、意味なども問題となる⁸。出発点として、コロケーション頻度は常に有効か、ということは考えておく必要があるだろう。語の共起といってもさまざまなレベルのものがあるからである⁹。大雑把に、①イディオム (*kein Blatt vor den Mund nehmen*)、②イディオム的なもの (*den Hunger stillen, den Durst löschen/stillen*)、③ある程度共起語のクラスが予想されるもの (*ranzig: so, daß das Fett darin alt ist und schlecht riecht und schmeckt* <Butter, Öl, Nüsse ...>)、④共起語にあまり共通性が見出せそうにないもの (*stellen* <Themen, Fallen, Zeugen ...>) のような段階を想定するならば、コロケーションの頻度が有効に活用できそうなものは、②から③の辺りということになる。

また、学習場面との関連で言うと、コロケーション情報は受動的な言語使用に際してはあまり大きな意味を持たないと思われる。我々が実際に辞書を引きながらドイツ語を読むときのことを思い浮かべてみると、単語に関して必要とする情報は、多くの場合、その意味のみである。ただし、検索の効率化を図るという点において、辞書編纂者にとってコロケーション頻度は有意義な情報である。

コロケーション情報が学習者にとって重要となるのは、主に能動的な言語使用に際してということになる。そしてその際どのような情報が必要かということになると、それは「間違いをなくす (減らす) ことができる情報」ということになる¹⁰。

2.2.1. コロケーションと形

結合価理論で問題とされたことが、ここでも同様に問題となると思われる。次の例を考えてみよう。よく知られた Helbig/Schenkel による結合価辞典の冒頭からの引用である。

So bilden Ausländer immer wieder falsche Sätze wie „*Ich besuche“, „*Ich gebe“ in Analogie zu den richtigen Sätzen wie „Ich trinke“, „Ich höre“¹¹. (Helbig/Schenkel 1991: 11)

Ickler (1985) によれば、ここで誤りとされている „Ich besuche“ については、そもそも誤りなのか、どこに原因があるのか、その本質は何か、といったことは、最終的にはコンテク

⁸ このように書くと、すぐに結合価理論が思い浮かぶが、コロケーション頻度と語の特性の間に関連性を見出そうとする視点は特に目新しいものではない。例えば Ickler (1985) は、*„Valenz‘ entsteht allererst durch gewohnheitsmäßige Kollokation.“* (364) と述べている。

⁹ コロケーション分析の各種方法やその特徴についてはここでは立ち入らない。これについては今道 (2008) を参照。

¹⁰ ドイツ語を用いる場合、語句の結合ということの前に、実際には語の選択という重要な問題がある。外国人学習者にとって類義語の使い分けは難しいものであるが、コロケーション情報の提示によって、その使い分けについての理解が進むということが考えられる。類義語分析のためのコーパス利用についても、今後さらに検討されるべきであろう。

¹¹ ただし実際に *hören* の項を引いてみると、*„Ich höre“* という構造は認められていない。

ストがないと判断できない。考えてみれば当然のことであるが、仮に „Ich besuche“ という文が実際に発話されたとして、その話し手が „Ich besuche x“ と言うつもりで、x 部分を言い忘れたとは考えにくい。発話者が意図した内容を考えてみるならば、それはおそらく「私が行きます」(= *Ich mache einen Besuch / Ich bin Vertreter*) といったものではないだろうか。そうだとすると、その話し手は、ドイツ語では *besuchen* をそのような意味合いで、「絶対的」に用いることが一般的でないということを知らなかったことになる¹²。

また、„Ich besuche“ という文が日本語母語話者によって発話されたとしたら、日本語からの類推という要因も考えられる („Besuchen Sie ihn morgen?“ – „Ja, ich besuche.“)。ただしそうだとすると、問題の現象はドイツ語一般に該当する規範——このような場合代名詞を繰り返すのがふつう——として文法の枠内で教えられるべきであり、個々の動詞のコロケーション(結合価)として逐一教えるのは合理的ではないであろう。以上はほんの一例に過ぎないが、コロケーション情報を教育現場で有効に活用するためには、学習者の発話意図にまで踏み込んだ、きめの細かい誤用分析も同時に進めていく必要があるということである。

次に、使用頻度の高いものから先に学ぶことが常に合理的か、という点について、動詞 *warten* を例に考えてみたい。前述の DWDS コーパスや、Leipzig 大学の *Wortschatz* を用いてコロケーションの状況を調べてみると、*warten* と高頻度で共起する語は、*lange*, *müssen*, *darauf* などであることが分かる。では *warten* を „Ich mußte lange darauf warten“ または „auf+[4格][時間] warten (müssen)“ のような形で教えるべき(学ぶべき)であろうか。これについてはいろいろな考え方が可能であろうが、ここでは頻度を絶対視することにも問題があるのではないかと、いうことを述べておきたい。一般に共起語句が多いほどその語の意味は特定化される。仮に学習者が共起語句の多い特殊な語義を先に学んだとすると、実際の使用場面において融通が利きにくくなる可能性が高まる。特に初級者の場合は、さまざまな現実を前に、限られた語彙を最大限にやりくりする必要がある。その点を踏まえると、とりわけ初級段階においては、できるだけ特定化されていない語義から出発し、その後特定化した語義へと進む方が効率的であると言えるのではないだろうか(そもそも、初期の段階から、外国人と区別がつかないほど慣用的な表現を使いこなせるようにすることがドイツ語教育の優先的な目的であろうか)。

また、この問題は別の観点から次のように考えることもできる。我々の母語である日本語と対比すると、「待つ」という語義自体にコロケーション情報はすでに含まれていないであろうか。すなわち、*warten* のコロケーション情報をわざわざ日本人学習者に教えようとするのは余剰的ではないか、ということである。日本語の「待つ」とコロケーションの状況があまり変わらないのであればなおさらのことである。ただし、形態に関する情報(auf+[4格])はもちろんこの限りではないし、また、辞書などで「自然」な用例を提示す

¹² ただし次の例文 i. が示すように、*besuchen* の「絶対的用法」が不可能なわけではない。同様の例として ii. に *besitzen* の例を挙げておく。いずれも結合価辞典において 4 格目的語が「義務的」とされている動詞である。

- i. Unsere beyden Freunde blieben nun noch einige Tage zu Rothenbeck, besuchten und wurden besucht. (J. H. Jung-Stilling, *Lebensgeschichte*; zit. nach Ickler 1985)
- ii. Ich wollte besitzen und besessen werden. (H. Murakami, *Ein modernes Volksmärchen für meine Generation*, Dt. Übers. v. U. Gräfe)

ることも別途必要である。

いずれにせよ、コーパス調査の結果をドイツ語教育にいかそうとするならば、どのような情報が日本人学習者にとって有意義なものであるのかを把握する必要があり、そのための日独対照研究を進めていく必要がある。

2.2.2. コロケーションと意味

ここでも、結合価理論で指摘されたことと同じような問題が生じる。やや極端な例ではあるが、次の例を見てみよう (アスタリスクはいずれも原著者による)。

- (4) *Emil weiß das zu Hause. (Welke 1988: 47)
- (5) *Die Sonne liest aus Grimms Märchen vor. (ebd.: 14)
- (6) *Die Katze gähnt die Maus. (ebd.: 47)

Ickler (1994) によると、例文 (4) は、学校で日常的に起こっていることを思い起こせば、決して不自然ではなくなる。「家では分かっていた」と主張する生徒に対し、先生が „Emil weiß das zu Hause, aber in der Schule weiß er es nicht!“ というような状況である。次の例文 (5) のような状況は、まさに童話の中では十分にあり得そうである。

最後の (6) については、本来自動詞である *gähnen* が他動詞として用いられているため、一見文法の問題として取り扱うべき問題であるように思われる。しかしながら、とりわけ構文文法的なアプローチにおいて指摘されているとおり (Zaima 1987, I. Ickler: 1990), 動詞は常に特定の構造においてのみ用いられるわけではない。個々の動詞は、その意味が許容する限りにおいて、さまざまな構造に現れることができる。そのように考えると、この (6) をめぐる問題は、結局は意味の問題であると考えることができる。ここでも、この文が実際に発話されたと想定してみるならば、その発話意図はどのようなものであろうか。まず、発話者が *gähnen* という動詞の意味を知らずに、何かほかの動詞と取り違えてしまったという可能性が考えられる。しかし、そうでないとするならば、その話し手はまさにこの文を用いて自らの意図を表現しようとしたわけである。Ickler (1994) では、良い行いをした褒美として、話をするたびに口から金貨が飛び出すグリム童話の女の子の話が引き合いに出されている。この場合、文字どおり „Es spricht Goldstücke“ という状況である。そのような話を踏まえると、「ネコがネズミをあくびする」という状況も十分にあり得るということになる。次の引用にこの点に関する Ickler の主張が簡潔にまとめられている。

Des Rasonierens über außersprachliche Wirklichkeiten und Möglichkeiten ist naturgemäß kein Ende, und der Linguist oder der Fremdsprachenlehrer darf keinesfalls etwas aus sprachlichen Gründen für unmöglich erklären, was der Sprecher aus sachlichen Gründen, mögen sie noch so phantastisch sein, tatsächlich mitzuteilen beabsichtigt. (Ickler 1994: 80)

すぐに気がつくとおおり、このような視点は日常なことば遣いの枠を越えた、創造的な言語の使用という問題へつながっていく。とりわけ言語芸術に携わる人たちにとって、日常のことばで表現し得ない体験や気持ちをどのように表現するのかということは、切実な問

題であろう。本稿の趣旨からはずれてしまうので立ち入ることはしないが、この点に関して示唆的な例を一つだけ挙げておく。

(7) *Sie schlief die Welt.* (R. M. Rilke, *Die Sonette an Orpheus*)

彼女は世界を眠っていた。(高安国世訳)

以上のことから言えるのは、コーパス分析の結果がただあるだけでは不十分で、それが実際に教育の現場で役に立つには、ことばの運用に関わるさまざまな側面についての教師側の十分な問題意識が欠かせないということである。

II. 事例研究

1. 日本人学習者のための対照研究へ向けて

日本におけるドイツ語教育の現場では、日本語に由来するような誤りにも注意が払われなければならないことを述べたが、日独語の相違を考えた場合、さらに興味深いのは、「文法」や「語法」に問題がないにもかかわらず、不自然な表現が生じる可能性があるという点である。この背後には、そもそも事態をどのように把握するのかという、発話に先行する事態把握 (construal) の問題があると考えられる。どの言語の話し手であっても、同一の事態についていくつかの異なるやり方で把握し、それに応じて異なるやり方で言語化するという能力を有しているが、特に日本語とドイツ語の相違を考えた場合、日本人学習者が、同一の事態をドイツ語母語話者とは異なったやり方で把握し、結果的に不自然なドイツ語表現を構成してしまっているという可能性は十分にあり得るであろう。もちろんこの種の問題は傾向として捉えられるべき問題である。そのような「好まれる言い回し」——つまり、その言語の話し手によって好んで採られる表現の構成の仕方——の傾向をコーパスにより抽出できないであろうか。コーパスの言語教育への応用を考えた場合、最終的にはこのような問題も射程に入ってくることになるだろう。この種の相違を捉えるのに、日独語を同じコンテキストで対照できる言語資料として、小説などの原文とその翻訳文が格好の材料となる。本稿を締めくくるにあたって、翻訳資料を用いたアプローチの可能性を示したい。

2. *sehen* と「見る・見える」の調査から見えてくるもの

最も基本的な知覚動詞である *sehen* と「見る・見える」を取り上げてみる。調査対象として用いるのは、Bernhard Schlink の *Der Vorleser* (1995) とその翻訳 (『朗読者』松永美穂訳, 2000) および村上春樹の『ノルウェイの森』(1987) とその翻訳 (*Naokos Lächeln*, Ursula Gräfe 訳, 2001) である。いずれも現代作家による作品であり、それぞれが日独両国においてベストセラーとなったものである。

まず、語義は考慮せず、それぞれの動詞の使用状況を単純に一覧にすると次のとおりである。「知覚者」や「知覚対象」が言語化されている頻度もあわせて示す。

【表 1】 B. Schlink, *Der Vorleser* / 松永美穂訳『朗読者』

		総数	見る人などの表示	見える対象の表示
ドイツ語原文	sehen	125	112 (90%)	122 (98%)
日本語訳	見る	115	62 (54%)	100 (87%)
	見える	42	2* (5%)	36 (86%)

*内訳：わたしには (1 例), ぼくの目には (1 例)

【表 2】 村上春樹『ノルウェイの森』 / U. Gräfe 訳, *Naokos Lächeln*

		総数	見る人などの表示	見える対象の表示
ドイツ語訳	sehen	191	165 (86%)	180 (94%)
日本語原文	見る	263	115 (44%)	200 (76%)
	見える	107	5* (5%)	87 (81%)

*内訳：僕には (1 例), 僕は (1 例), 他の人々に[見えないのか] (1 例), 目に (2 例)

大雑把な比較ではあるが、日独の知覚表現の相違を十分に見て取ることが可能である。sehen では「誰かが何かを見る」という用法を基本とするのに対し、「見る」「見える」では、知覚者は言語化の対象とはなりにくいことが分かる。「見る」という他動詞であっても「知覚者」が表示されるのは約半数程度であり、自動詞の「見える」においては「知覚者」が実際に表示されることはほとんどないと言ってよい。次のような例が典型的な状況を示している。

- (8) a. Ich fahre im Auto. Ich sehe rechter Hand das Haus und [...] (B. Schlink, *Der Vorleser*)
 b. ぼくは車を運転していて、右手にあの家が見える。(松永美穂訳)

ただし、単純な頻度の比較からは見えてこないこともある。一つには、それぞれの語彙に見られる語義のずれ・広がりの問題である。実際に両テキストを照らし合わせてみるとすぐに分かることであるが、sehen と「見る・見える」は常に対応しているとは限らない。sehen には「会う」「分かる」なども対応するし、「見る」には ansehen, aufsehen などの複合動詞や, blicken, betrachten などの異なった動詞も対応する。コロケーションの問題もある。例えば「見る」は「面倒を見る」や「夢を見る」などの結合でも用いられる。単純に sehen と対比させることには問題があるだろう。このような点については、今後、翻訳資料などに基づいた実証的な調査を積み重ねる必要がある¹³。本格的な調査に基づいた実体性のある辞書や教材が作成されれば、教師にとっても学習者にとっても大変有意義なものとなるだろう。

さて、これとは別の問題もある。個々の語彙のレベルでは捉えることのできない次のような場合である。

¹³ 藤濤 (2005) は一つの実践例として大変興味深い。

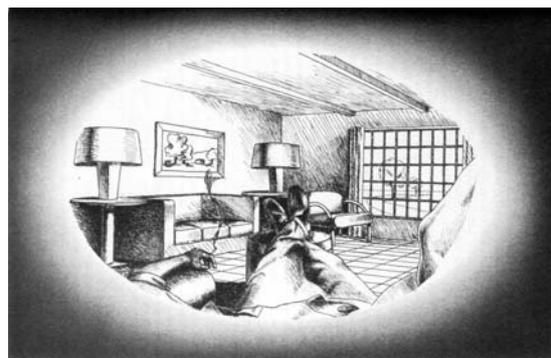
- (9) a. Wenn ich das Haus auf dem Land sehe, dauert der Traum länger, [...] (B. Schlink, *Der Vorleser*)
- b. その家が田舎にあるときは, 夢はもっと長く続く。(松永美穂訳)

ドイツ語では知覚を表わす動詞 *sehen* が用いられ, それにより「知覚者」と「知覚対象」が言語化されているが, 一方, 日本語の方は「…がある」という単純な存在の表現になっており, それを知覚している「知覚者」は言語化されないままとなっている。同じ状況に対して異なった表現が用いられており, 話し手がある事態をどう捉えるかという事態把握の差異が認められる例である。このような例は日独語の知覚表現の対照を行うと, 実際に頻繁に見られるものである (Ozono 2003, 2008a を参照)。この差異について, 次節で詳しく見ていきたい。

3. 「見え」を語る——主観的事態把握と「見えない自己」

上の (9) に見られる差異は, 近年の認知言語学において「主観的事態把握」(subjective construal) と呼ばれている事態の捉え方との関連で考えることができる (Ikegami 2005, 本多 2005 など参照)。日本語の (9b) において, 話し手 (語り手) は, 自らが原点となって知覚した事柄を, そのまま, つまり見えるままに言語化しているだけである。話し手の知覚可能な範囲における存在を描写していると言ってもよい。この点は重要である。なぜなら, この文は単純に客観的な存在 (例えば「松江には宍道湖がある」) を表現しているわけではないからである。そしてその際, 話し手自身は知覚の原点として知覚の対象とはならず, 従って言語化もされない。つまり「知覚の原点としての自己」は「見えない」わけである。次の Gibson (1986) の挿絵とあわせて考えると分かりやすい。このような, いわば「自己中心的な」事態の把握の仕方を「主観的事態把握」と呼ぶ (詳細は Ozono 2008b)。

主観的事態把握: 話し手は問題の事態の中に自らの身を置き, その事態の当事者として体験的, 臨場的に事態を把握する。話し手自身は認識の原点として言語化されず, 暗示的なままにとどまる。



【図1】左目に見える部屋の様子
(Gibson 1986: 113)

一方, ドイツ語の表現では, 話し手 (語り手) は知覚している自己を客体化し, 言語化の対象としている。

次は日本語が原文となっている例であるが, ここでも両者の差異が明瞭に現れている。

- (10) a. ^{まつたかだち}先高館にのぼれば, ^{たいが}北上川南部より流るゝ大河也。(芭蕉「おくのほそ道」)
- b. Wir stiegen zuerst auf den Takadachi-Hügel, wo wir den Kitakami-Fluß betrachten konnten, der aus der nördlich gelegenen Nambu-Gegend kommt. (G. S. Dombrady 訳)

原文の (10a) では、芭蕉の見た風景がそのまま言語化されているだけであり、典型的な主観的事態把握の例であると言える。ところがドイツ語訳の方は、風景を見ている主体 (芭蕉および同行者の曾良) が客体化され、言語化された格好になっている (wir konnten betrachten ...) ¹⁴。

現代文からの例も見ておこう。

- (11) a. 片桐がアパートの部屋に戻ると、巨大な蛙が待っていた。(村上春樹「かえるくん、東京を救う」)
- b. Als Katagiri in seine Wohnung kam, wartete dort ein riesenhafter Frosch auf ihn. (U. Gräfe 訳)
- c. Katagiri found a giant frog waiting for him in his apartment. (J. Rubin 訳)

参考として英語訳を挙げたが、ここでは英独間にも相違が見られ興味深い。英語訳では、「知覚者」が明確に客体化された表現になっている。それに対し、ドイツ語訳の方は原文の構造を比較的忠実に反映した訳となっており、一見したところ英語訳ほどには違和感がない。しかしながら、下線部で示したとおり、ドイツ語訳では、原文になかった要素として事態に関わる「場所」や「当事者」が客体化され、言語化されている。その結果、日独それぞれのテキストから受ける印象はやや異なるものとなっている。ドイツ語訳における語り手の視座は、英語訳ほどではないにせよ、場面から一步引いているという印象を受ける。一方、日本語文における語り手の視座は極めて臨場的である。そこでは、知覚の原点としての「知覚者」だけでなく、事態を構成する「場所」も言語化されず、語り手はいわば場面の中に埋め込まれているような格好になっている。

以上の相違は、日本語とドイツ語を広く特徴づけている一般的な傾向として捉えることが可能であると思われるが、そうであるとするならば、ドイツ語教育において、日本人のためのより「自然なドイツ語」の提供というものを考えるとき、言語化に先行する事態把握のレベルについても、踏み込んで考えていく必要があるということになる。

4. 好まれる言い回し——結びに代えて

ことばによる表現には、文法的に正しく、語法的にも妥当で、その上 <使用域> [...] に関してまったく問題がなくても、その上でなお、母語話者が見ると決して ‘natural’ とは言えないものもある [...] (池上 2006: 5)

ここで述べられていることは、外国語教師なら誰でも実感していることではなかろうか。表現のそのような「自然さ」、「不自然さ」をもたらず要因として、本事例研究では「好まれる言い回し」の相違ということを取り上げ、論じた。この種の日独語の相違について、実際の授業でどのように導入し、どのように練習を重ねていくのかということとはまた別の

¹⁴ 池上 (2006: 192ff.) も参照。日英語を対象に同様の事例が論じられている。

問題であり、別途検討がなされなければならないが、まずは問題についての「気づき」がドイツ語教育向上のための第一歩となることは間違いないであろう。本稿では詳しく取り上げる余裕がなかったが、最後にほかの例もいくつか挙げておく。

- (12) a. 僕が眠っているのを見ていてほしいんだ。(村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」)
b. Ich möchte gerne, daß du meinen Schlaf bewachst. (A. Ortmanns/J. Stalph 訳)
- (13) a. Den alten Heilandt stimmte Schugger Leos Anblick heiter. (G. Grass, *Die Blechtrommel*)
b. ハイラント老人はシュガー・レオの姿をみて、快活になった。(高本研一訳)

(12) の文のペアでは、「知覚対象」が、前者では動詞句として、後者では名詞句として表現されている。(13) では、知覚という事態そのものが、前者では名詞句として、後者では動詞句として、それぞれ表現されている。一般化して言えば、いずれも、ある事態を「モノ」として捉えるのか、「コト」として捉えるのかという点で対立しており、やはり事態の捉え方の問題が根底にあると考えることができる(詳細は大藪 2005)。

事態把握の問題は、もちろんこれまでも、主に日独語の発想の違いという観点からさまざまな形で取り上げられてきたテーマである。しかしながら、現在では、本稿で用いたような翻訳資料を含め、対照研究の素材となる言語資料は以前より大幅に増え、またそれらを電子データの形で処理することも従来とは比較にならないほど容易になった。もっとも、すべてが機械的に進むわけではないということは、本稿で再三にわたって強調してきたとおりである。そのような点も踏まえた上でなお、今後は、より客観的な形で、実質的な分析を積み重ねていく必要があるし、また実際にそれが可能な状況になっていると言えよう。

参考文献

- Beaugrande, Robert-Alain/Dressler, Wolfgang Ulrich (1981): *Einführung in die Textlinguistik*. Tübingen: Niemeyer.
- 藤濤文子 (2005): 「日独翻訳にみる異文化コミュニケーション行為——『ノルウェイの森』の独語訳分析」『神戸大学ドイツ文学論集』34, 31-50.
- Gibson, James J. (1986): *The Ecological Approach to Visual Perception*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.
- Helbig, Gerhard/Schenkel, Wolfgang (1991): *Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben*. 8. Aufl. Tübingen: Niemeyer.
- 本多啓 (2005): 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会.
- Ickler, Irene (1990): 'Kasusrahmen und Perspektive. Zur Kodierung von semantischen Rollen'. *Deutsche Sprache* 18, 1-37.
- Ickler, Theodor (1985): 'Valenz und Bedeutung. Beobachtungen zur Lexikographie des Deutschen als Fremdsprache'. In: Bergenholtz, H./Mugdan, J. (Hg.): *Lexikographie und Grammatik*. Tübingen: Niemeyer, 358-377.

- Ickler, Theodor (1994): 'Standardanalysen. Methodische Probleme bei der semantischen Fundierung der Grammatik'. *Deutsch als Fremdsprache* 31, 80-85.
- Ikegami, Yoshihiko (2005): 'Indices of a 'Subjectivity-prominent' Language'. *Annual Review of Cognitive Linguistics* 3, 132-164.
- 池上嘉彦 (2006): 『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会.
- 今道春彦 (2008): 「ドイツ語学習者のためのコロケーション抽出に向けて——統計学的指標の有
用性」 *Neue Beiträge zur Germanistik* 7 (2), 250- 271.
- Ozono, Masahiko (2003): 'Subjektive und objektive Auffassung eines Sachverhalts am Beispiel von
Ausdrücken zur Sinneswahrnehmung'. *Neue Beiträge zur Germanistik* 2 (2), 91-100.
- 大藪正彦 (2005): 「「好まれる言い回し」とドイツ語教育——モノ、コト、トコロの把握に見る
「ドイツ語らしさ」」『ドイツ文学論集』(日本独文学会中国四国支部) 38, 1-11.
- Ozono, Masahiko (2008a): 'Wahrnehmung und sprachliche Ausdrücke. Subjektive Auffassung im
Deutschen'. *Journal of the Foreign Language Education Center, Shimane University* 3, 81-95.
- Ozono, Masahiko (2008b): 'Subjektive und objektive Auffassung. Zwei Raumauffassungsweisen in
kontrastiver Sicht'. *Neue Beiträge zur Germanistik* 7 (1), 75-90.
- Schumacher, Helmut u.a. (2004): *VALBU – Valenzwörterbuch deutscher Verben*. Tübingen: Narr.
- 白川博之 (1999): 「実例か作例か」『くろしおNEWS』18, 4.
- Welke, Klaus M. (1988): *Einführung in die Valenz- und Kasustheorie*. Leipzig: VEB Bibliographisches
Institut Leipzig.
- Zaima, Susumu (1987): "Verbbedeutung' und syntaktische Struktur'. *Deutsche Sprache* 15, 35-45.
- 在間進 (2009): 「ドイツ語コーパスの現状」『国文学——解釈と鑑賞』1月号, 150-157.